

軍艦浅間座礁事件

次に黄紙の標的となった事件は「軍艦浅間座礁事件」である。1914年8月3日、英国はドイツに宣戦を布告した。続いて英国海軍本部は、極東において英商船隊を攻撃しているドイツ極東艦隊を叩くため、同盟関係にある日本政府に支援を要請してきた。これを受け日本は8月23日正午、ドイツへの宣戦を通告した。翌日、日本海軍はドイツ極東艦隊の基地青島へ出撃したが、ドイツ艦隊は既に南太平洋へ向かっていた。インド洋ではドイツ巡洋艦が既に多くの同盟国商船を沈めていた。ドイツ極東艦隊の巡洋艦ドレスデン、ライプチヒの二隻、擬装商船クロンプリンツ・ヴィルヘルムがおオーストラリアやニュージーランドの商船を攻撃する危険が迫っていた。1914年9月14日、巡洋艦浅間（吉岡艦長）が出動命令を受け、横須賀海軍基地を出発した。⁷

浅間を含め三隻の巡洋艦、二隻の駆逐艦はドイツ領のマーシャル＝カロリン群島へ向かった。12月5日、浅間は艦隊から離れ、ハワイへ向かう指令を受けた。ホノルルに入港したドイツ軍艦グリアーを湾外で待機し、出てきたら撃沈あるいは拿捕するためであった。間もなく巡洋艦肥前も加わったが、11月8日、アメリカがグリアーを抑留し決着がついた。

極東艦隊は南太平洋から南米沖に向かっているとの観測が強まっていたが、11月1日、チリ沖でイギリスの巡洋艦二隻を沈めた。英国海軍本部は南米沖の極東艦隊を撃つため同盟軍艦隊を再編成し、サンフランシスコ沖合にいた出雲、ハワイ沖の浅間、肥前を南加沖にあるサンクレメンテ島に集結させ、それに英巡洋艦ニューキャッスルとオーストラリアが加わることになった。浅間と肥前が到着したときには、他の艦船はすでに南に向かっていたが、11月22日、カリフォルニア半島のマグダレナ湾で追いついた。浅間などの日本艦を含むイギリスのアメリカ艦隊はパナマ湾、ガラパゴスを巡り、エクアドル沖を航行中の12月11日、イギリス艦隊がフォークランドでドイツ艦隊に快勝した知らせが入った。その海戦で難を逃れたドレスデンと特務巡洋艦プリンツ・エイテル・フリードリッヒが再びチリ沖へ向かったとイギリス海軍本部は考えた。⁸

イギリス艦隊勝利の知らせを受けた翌日、ニューキャッスルはジャマイカへ向かい、出雲の森山艦長の指揮で、二隻のドイツ艦を追うことになった。その間一月近く捜し求めたが見つからず、1915年1月9日、森山は敵艦がまだチリ沖にいるとは考えられず、北に向かっていると思われるので、これから北上しサンディエゴ周辺海域に向かう、とジャマイカの英海軍提督に打電した。

司令官森山の予想を裏付けるような情報が次々に入った。ドイツ商船ヴォン・コルがサンフランシスコに入港したこと、サンディエゴのドイツ領事が商船のチャーターを進めていることから、ドレスデンがサンフランシスコに入港すると予測された。さらに現在エンセナダでマザラン号が石炭を搭載していて、これからマザランに向かい、ドレスデンに石炭を供給する噂があること、などでであった。1月23日、艦隊はマグダレナ湾に到

着した。9

森山司令官は中立国アメリカの港湾を見張るため、艦隊を北に移動することを決め、浅間艦長吉岡にサン・バルトロメ湾を基地に、合衆国沿岸のパトロールを命じ、出雲はサンフランシスコ沖に向かった。森山には北に向かう別の目的があった。天皇の名代としてパナマ運河開通式典に出席するためサンフランシスコに向かっている出羽海軍大将の安否が気掛かりであった。途中、出雲はエンセナダに寄り、マザトラン号を調査した結果、同船はベヌステリアノ・カランサがチャーターしたもので、ドレスデンの補給船ではないことを確認した。一方の浅間はマザトランを探索したが、確たる証拠を見出せず、サン・バルトロメ湾へ向かった。浅間はマザトランで石炭を積んだイギリスの石炭船レナ号を伴い、サン・バルトロメ湾で石炭の補給を受けた後、共にドレスデンとプリンス・エイテル・フリードリッヒを探して北に向かう予定であった。10

1915年1月31日、浅間は時化模様の海上をサン・バルトロメ湾へ直進していた。午後一時五十二分、湾口の中央、海岸から一マイル半にある、海図に示されていない暗礁に乗り上げた。サン・バルトロメは今日のバイア・トルトゥガス (Turtle Bay) のことで、およそ北緯二十七・五度、西経百十五度に位置する。入港時の潮位は低く、六ノットで航行中三回ほどショックを感じ、最後のショックで完全に動けなくなった。吉岡艦長の懸命の努力にもかかわらず離礁できず、暗礁が突き出た形で、これ以上動くと、転覆し沈没する恐れがあった。午後四時、ボイラールームは完全に冠水し、機関室の水位も一・二メートルの高さまでになった。船体の中央部に長さ十五メートルの穴があいていた。11

エンジンが停止し、発電機も動かなくなり、無線機が使えず、サンフランシスコ沖の出雲と連絡が取れなかった。レナ号は無線機を備えていなかった。その日の夜、イギリス石炭船ボイン号が到着し、直ちにサンディエゴに向かい、出雲に急を知らせることになった。海軍省司令官ハワードは、交戦中の軍艦の事故であり、直ちに報道管制を布いたが、ボイン号の乗組員から浅間座礁の話が漏れた。アメリカ海軍は直ちに三隻の軍艦をバイア・トルトゥガスに送ったが、吉岡艦長は中立国からの援助を固く断った。12

2月12日、浅間遭難の知らせを受けた出雲が現場に到着し、森山艦長自ら状況を確認した後、直ちに修理船を要請した。海軍省は素早く対応し、四時間後には修理船鎌倉丸と関東丸が出発したことを伝えてきた。2月22日、巡洋艦千歳と補給船甲南丸が救援に駆けつけた。

3月19日、待ちに待った巡洋艦常磐と修理船鎌倉丸が到着した。ここで常盤と交代した出雲は帰国の途についた。3月24日、修理船関東丸が到着し、作業が開始された。横須賀海軍工廠工場長岩野が橋口海軍大尉以下二百五十名を指揮した。修理部隊は二十日かけて千二百トンの機材を浅間から取り外した。5月8日午後五時高潮、浅間は離礁に成功した。座礁してから九十八日目であった。修理船関東に横付けされた浅間の船底の穴を塞ぐ応急処置に更に三ヶ月を要した。

8月23日、千歳と関東に伴われた浅間はブリティッシュ・コロンビアで修理するため六ノットで北へ向かった。カナダのドックヤードで四十三枚の鉄板を取り付け、10月23日、関東にエスコートされ、毎時百トンの水をくみ出しながら1915年12月18日、横須賀海軍基地へ到着した。二日後吉岡艦長と士官は大正天皇に謁見し、他の乗組員は12月23日、皇居へ招待された。¹³

巡洋艦浅間の事故を誇張した脅し記事を最初に報道したのは1915年4月14日のロスアンゼルス・タイムスであった。「日本はタートゥル湾に艦隊を集結させ何を企んでいるのか」の見出しが一面にでかでかと載った。アルバート・ネーサンの署名入り記事は、「噂を調査するため現地に派遣したタイムス特派員によると、港には六十トンの機雷が敷設され、戦略基地の建設のため武装した軍隊を認めた。我々の足元、メキシコに再び現れた黄禍を見よ・・・マグダレナ湾以北で最良のタートゥル湾は日本艦隊の半分が錨泊でき、アメリカの軍艦の入る余地はない・・・」ネーサンは、浅間は船首を泥に突っ込んだだけであり、同湾にいたサルベージ船グリーンウッド号の船長によれば、浅間の損傷は軽微で、浮上には数時間もかからないだろうと言うことであった、として更に続けた。陸には無線基地があり、四千人の日本軍水兵や陸戦部隊が上陸して、今や日本が至近距離からアメリカを攻撃し、パナマ運河へ到達できる危険があることを読者に警告せずにはいられない、と書きたてた。日本は浅間を湾口に座礁させ、侵入の口実を設けたのは明白である、と締めくくった。ニューヨーク・タイムスもこの記事轉載した。¹⁴

翌日ワシントンの日本大使館はロスアンゼルス・タイムスの報道を非常識でばかげたことであると反論した。2月6日から浅間の事故を正確に報道してきたサンディエゴ・ユニオンは4月22日、ネーサンの記事を捏造であると決め付けた。さらにネーサンに決定的な打撃を与えたのは、サンディエゴ・ウイークリー・ユニオンが掲載したグリーンウッド号船長ホワイトロウのインタビューであった。「タートゥル湾に機雷は敷設されていないし、軍事基地もない。湾の入り口にある突出した岩によって串刺しになった状態の浅間を救い出すために、彼らはあらゆる手を尽くしている」。

4月15日のニューヨーク・ヘラルドは五隻の軍艦と六隻の補給船、上陸した四千人の軍隊と無線局を認めたと報じた。全ての経緯を知っていた政府が、それらの記事が出鱈目であることを明らかにしてから謝罪した新聞はわずか、殆どは口を閉じたままであった。5月7日、キュナード・ラインのルシタニア号がドイツのUボートに撃沈され、巡洋艦浅間座礁事件は蔭に葬られた。¹⁵

1906年から1917年まで、マグダレナ湾やタートゥル湾のような出鱈目な報道は後を絶たなかった。Kawakamiが数えたところによると、二十八回にもものぼった。最も頻繁に用いられたのは、ある場所で多くの日本人が集まり軍事教練を行っているというものである。その中の一つに、四十万人の日本人兵士がメキシコにいて、アメリカへの侵入に

備えている、という記事が掲載された。曰く、それらが兵士であることは知られていなく、農夫、庭園業者、鋤夫、事務員などに身にやつしているが、実は、彼らは訓練を受けた兵士であり、北へ侵入するのが本来の仕事である。この話が広く流布されたのは1916年のことであった。これについてメキシコの日本公使館が調査に乗り出した。その結果がジャパン・ソサエティー公報第三十四号（1916年10月23日）に発表された。メキシコに在留する日本人は二千人以下、そのうち三百人が女性と子供であり、残りは千七百名程度、軍事教練を受けたものはその僅か十パーセント以下であった。このような根拠のない作り話を一般大衆は信じた。何らかの理由により日本とアメリカの関係を悪化させることを企んだ一部の人は、何が何でも日本を敵にしようとし、狼少年をくり返し、ついに真珠湾攻撃に至るのである。¹⁶

7. Donald H. Estes, "Asama Gunkan, The Reappraisal of a War Scare", The Journal of San Diego History, Summer 1878, Vol. 24 #3, P32
8. Ibid. P9
9. Ibid. P10
10. Ibid. P11
11. Ibid. P12
12. Ibid. P13
13. Ibid. P23
14. Ibid. P20
15. Ibid. P22
16. Jabez T. Sunderland, M. A., "Rising Japan; Is she a Menace of A Comrade to be Welcomed in the Fraternity of Nations?", G. T. Putnum's Sons, 1918, P70